

I
美しい日本語

sample

sample

日本語の魅力

日本語にはことわざ成句が多い。どの言語にもことわざ成句の類はたくさんあるのだろうが、比較の問題ではない。日本語にはいろいろな場面に的確にさらに効果的に対応する素敵な表現がたくさんある。

うら若い女性の美しさを「花も恥ぢらう」という。「水も滴る」はもう少し年増に対してになるが、これは男性についてもいう。「花」に関して、「女やもめに花が咲く」ということわざもあるが、その前に「男やもめに蛆が湧き」という句があるのを忘れている人が多い。「高嶺の花」を「高値の花」と誤る人も多い。

最近、ことわざ成句を誤って使っている例がとても多い。「枯れ木も山の賑わい」を「枯れ木に花の賑わい」に誤る。また尊敬すべき長老に対して使ったりする。誤用例は、「目鼻が利く(正しくは「目端」)」「怒り、心頭に達する(発する)」「頭を突っ込む(首)」「毒を盛って毒を制す(以て)」などは「目端」「怒り、心頭に達する(発する)」「頭を突っ込む(首)」「毒を盛って毒を制す(以て)」など枚挙に暇がない。先般『明鏡ことわざ成句使い方辞典』(大修館書店刊)を編んだ際に、巷間誤って使われている例のあまりに多いことを痛感して、各項目に《誤用》という欄を設け、巻末に《誤用

索引》を備えた。辞典たるもの、正しい意味や使い方を解説するのが第一だが、それだけでなく誤用についても、どこが違うのか、どうして誤用が生じたのか、その誤用がどの程度まで一般化しているか、などについても言及すべきだというのが、私の辞書作りの基本的な考え方だが、それにしては誤用が多すぎる。

それはともかく、ことわざ成句は、泡沫のごとくかつ生れかつ消え失せた多くの言葉の中で生き残った、珠玉のような名言名句だ。この言葉の文化遺産が日本語を厚く奥深く豊かなものにしていく。ことわざ成句の多いことは、日本語の大きな魅力の一つだ。古き良き言葉は大切に守らなければならぬ。

日本には詩歌の長い伝統がある。記紀万葉の頃から現代に至るまで、詩歌は歌い継がれてきた。和歌は平安貴族のものと思われがちだが、庶民にも愛されていたし、連歌・俳諧に至っては完全に庶民のもので、その裾野は広がった。そして、和歌(短歌)、俳諧(俳句)を詠み、鑑賞することを通して、言葉は磨かれ、洗練され、継承されてきた。言葉だけではない。言葉で表現する内容、つまり、ものの見方、捉え方、考え方も洗練されてきた。

たとえば、一〇世紀の初めに成立した『古今和歌集』は全二〇巻から構成されているが、そこにはしっかりと部立てがある。恋の部は五巻からなるが、「恋歌一」は

ほととぎす鳴くや五月のあやめ草あやめも知らぬ恋もするかな

という歌が始まる、逢う前の恋の巻だ。そして、「恋歌五」は、

流れては妹背の山の中に落つる吉野の河のよしや世の中
という歌で終わり、恋の終わり、諦めの歌の巻になっている。恋一から恋五まで、恋の進展に従って整然と分類されている。こういう恋の展開は、現実の世界でも、比較的最近まで継承されてきたが、出会ったその日に結ばれ、簡単に別れてしまうような、恋の過程を欠いた現代の若者には細やかに順序立てて並べられた恋歌の内容や言葉は無縁のものになっているのかもしれない。

季節の歌はもつと分かりやすい。季節の歌の部立ては春夏秋冬になつており、春と秋はそれぞれ上下二巻ずつ。夏は暑すぎ、冬は寒すぎて、良い歌が少ないのだから、それぞれ一巻ずつだ。「春歌上」の最初の歌は

年の内に春は来にけり一歳を去年とや言はん今年とや言はむ

で、春立つ日の歌から始まるが、まずは雪、春霞から、梅が咲き、ついで桜が咲く。梅には鶯が来て鳴く。そして、三月が終わり四月(卯月)になると、卯の花が咲き、花橋にほととぎすが来て鳴く。四月になつても鳴いている鶯は「老い声」で鳴くものとされる。季節の移り変りを明確に捉えて詠み、それを整然と分類しているのだ。このように季節を風物によって区別する捉え方が時代を経て

洗練され、やがて俳諧における季語になる。

季節感もその一つだが、ものに対する感じ方、捉え方が繊細であれば、それに対応して、言葉も細やかに豊かになる。「ほのか」「さわやか」「奥ゆかし」など微妙な感覚を表す言葉は繊細な感じ方の中から生れる。古今集に

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

という歌がある。目にははつきりと見えないが、かすかな風の音で秋の訪れに気づいたというのだ。「ひやかに」と「驚かる」がすばらしい。この繊細な感じ方は自然との関係が薄くなった現在では難しくなっている。

「あお雲」「よこ雲」「うろこ雲」「いわし雲」「とよはた雲」など雲の名前や、「ふじ色」「あい色」「あずき色」「だいたい色」「うぐいす色」「はなだ色」「ひわだ色」「あかね色」「なまり色」など色の名前も同様だ。自然と深く接し物をしっかり見つめる確かな目がこういう言葉を生んできた。挙げればきりがなが、こういう言葉が忘れられていくのも忍びがたい。

日本語をその出自から、「和語」（大和言葉）、「漢語」、「洋語」（外来語）に分けてみたときに、和語には優雅さ・古さ、漢語には簡潔さ・固さ、洋語には新鮮さ・分かりにくさなどの長所短所がある。たとえば、和語「あゆむ」は優雅な響きをもつ。しかし、古い。「あるく」は日常的で新鮮な感

じに乏しい。それに対して、漢語「歩行」「散歩」などは簡潔でひきしまった語感をもつ。人名でも藤原定家を「さだいえ」と訓でよむのと（和語）、「ていか」と音で読むのと（漢語）では、感じが全然違う。ちなみに、名前の場合は「さだいえ」が正しいようだが、書の流派をいう「定家流」などは「ていかりゆう」と音で読む。

洋語でも、「カルタ」「ガラス」「タバコ」などのように古く入ってきたものには、新鮮さやスマートさを感じられないが、「あゆむ」「歩行」を「ウォーキング」と言い換えると、指す内容はまったく変わらないのに、感じは一変してしまう。ただし、洋語は新人の語だから、意味が分かりにくい。そういう特徴を知った上で使い分ける必要があるが、同じものを「やどや」「はたご」、「旅館」「旅宿」、「ホテル」、あるいは「髪結い」、「美容院」、「ヘアサロン」などのように三通りに言うことができ（すべての言葉に三種が揃っているわけではないが）、それが日本語を厚みのあるものにしていく。

その一部についてしか述べることができなかつたが、日本語の魅力は尽きない。